

日本の知恵、
プラスチックの知恵



国立国会図書館所蔵

不測に備えた、旅の相棒

「火打道具はたばこを吸わぬとも携帯すべし。宿屋の行燈は消えやすし」と説明するのは、旅の案内書として1810年(文化7)に出版されて人気になった『旅行用心集』(八隅蘆庵著)。江戸時代は通勤交代で五街道が整備され、庶民も「お伊勢参り」などへと旅をする機会も増えました。

旅に出るともなれば、不測の事態に備えて火打道具一式を携行するのは常識で、筆記用具の矢立などとともに、小型で便利なものが登場しました。

「火打袋」は、種火をおこす火打石・火打金・火口などを収納したもの。最初は「火の用心」と書かれた簡素な布製でしたが、のちに凝った織物や堅牢な皮革に金や漆をあしらったものまで現れ、実用と装飾を兼ねた装身具として発達しました。

大事なものをコンパクトに外気や衝撃から護る役割は、住友ベークライトのEMESHシリーズに似ています。外部環境からデリケートな半導体を護る機能が高く評価されている、環境対応型半導体封止用エポキシ樹脂成形材料。「スミンコン」EMESHシリーズは、湿気や衝撃に強く、高い実装性と信頼性があり、デジタル家電や車などさまざまな暮らしの進化に貢献しています。



半導体封止用
エポキシ樹脂
成形材料

デリケートな半導体を封止し、湿気や衝撃などの外部環境から保護するエポキシ樹脂成形材料。

火打袋

ひうちぶくろ

